SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

少数民族の中国文化大革命：国際社会の一部としてのフロンティアへの衝撃

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010099

少数民族の中国文化大革命
―国際社会の一部としてのフロンティアへの衝撃―

楊　海英

はじめに

中国文化大革命（以下、文革と略す）が発動されて五〇周年を迎えた今年、何が解明されて、どこがまだ謎のままなのかについて考えなければならない。毛沢東を中心とする権力の中枢での政治闘争や大都市部での暴力とそれに伴う社会変動に関する研究は汗牛充棟の観を呈してきた。書名をあげるまでもなく、図書館と本屋の「中国ものコーナー」で相当な割合を占めているのは「文革もの」だといえよう。

文革は東西冷戦時に勃発したことから、左と右の両陣営から礼賛派と批判派が生じた。礼賛派は文革を賛美することで資本主義を批判し、「横暴なソ連」への失望を毛の中国への希望に置き換えた。彼らにとって、現実の汚い中国はどうでもよく、大事なのは「イメージのなかの毛主義」だった[1]。日本の現実離れした中国像と毛幻想はフランス以上だった。中共支持者や進歩的な文化人を自認する人たちが中国政府に招待されて、事前に周到に用意されたコースを厳重にコントロールされて旅行する。一日三食に高級中華料理と酒が振る舞われ、おまけに小遣いまでもらって大名旅行をする。帰国後には中共の宣伝マンとして「毛主席には独裁者のかけらもないし、毛主席ほど独裁を嫌う人はいない」とか、「中国人民は皆幸せだ」だと褒め称えて、「資本主義に喘ぎ、米国の統治下にある自国」を批判した[2]。文革は欧米には「怒れる若者」と「カルチュラル・スタディーズ」の誕生を促したが、本国の中国と「一衣帯水」や「同文同種」の神話を盲信する日本には社会全体の「減衰や混乱」をもたらした。日本人の文革認識について長く研究してきた福岡愛子氏は次のように指摘する[3]。

> 文革にしろ日本の新左翼運動にしろ、その悲劇的な結末の重みを考えれば、そこに至る過程を検証することはもちろん必須である。日本の新左翼運動同時

---

1) リチャード・ウォーリン『1968　パリに吹いた「東風」―フランス知識人と文化大革命』（福岡愛子訳）、岩波書店、二〇一四年、一三三頁。

2) 日本の進歩的な文化人たちがいかに意図的に中共を賛美し、実態と乖離した中国像を構築してきたかについては、馬場公彦『戦後日本人の中国像』（新曜社、二〇一〇年）と栗田直樹『共産中国と日本人』（成文堂、二〇一六年）などに詳しい論考がある。

3) 福岡愛子「文化大革命以後の〈文化〉の政治」楊海英編『中国文化大革命と国際社会―50年後の省察と展望』静岡大学人文社会科学部アジア研究センター、二〇一六年、四一―六四頁。

者のなかにも、陰惨な内ゲバ事件を「他人事とは思えない」と感じた個人は多いだろう。

大勢の日本人は暴力的な左翼運動とは異なる道を日本国内で歩んだだろうが、中国の暴虐を認めようとしなかったのではないか。多くの研究報告が出されているにも関わらず、中国の暴力性を分析した研究を「中国批判本」だと決めつける政治的姿勢は、自分たちが勝手に作り上げた、どこにも存在しない「想像の中国」像の崩壊を受け入れたくないともがく日本人の精神性の現れであろう。

周知のように、中国は今、内部においては深刻な民族問題を抱えているし、対外的には日本と東南アジア諸国との間の熾烈な領土・領海紛争に直面している。文革後も中国幻想を抱きつづける日本の進歩的な文化人や政治家、それに財界のブルジョアたち[4]は意図的にせよ、無意識にせよ、中国の対内と対外的な暴力的行動を非難しないことで、北京当局に加担している。例えば、戦後に一貫して日本の沖縄政策を批判してきたノーベル賞作家の大江健三郎も一度たりとも、中国による少数民族弾圧について発言したことがないではないか。人権云々と美辞麗句を並べているが、まるで中国の少数民族は彼らが想定する「人類」のジャンルに入っていないようである。

以下、私は中国の四大少数民族自治区で展開された文革について概説する[5]。結論を先に示すと、少数民族は辺境に居住していたこともあり、どれも国際社会と連動している。換言すれば、少数民族地域の文革はその地域の住民が国際社会とつながっていたがゆえに、すべて国際問題の性質を帯びている。その国際問題は今や新しい国際関係の一環として具現され、グローバルな国際問題、宗教問題と化している。

1. 対日間接的清算としての南モンゴルの文革

まず、内モンゴル自治区の中国文革の実態を見てみよう。控えめな政府公式見解では三四万六千人が逮捕され、二万七千九百人が殺害され、十二万人に身体障害が残されたという。当時のモンゴル人の人口は一五〇万人弱だったので、平均して各家庭から一人が逮捕され、五三人に一人が殺害されていることになる。そして、身体に障害が残った者もその後、迫害が原因で亡くなる「遅れた死」も含めると、モ

---

4) 栗田直樹氏の指摘通り、日本の財界人は日本人の中国幻想を利用して、日本と中国の双方で金儲けをしようとしている。栗田前掲書、一八頁。

5) 紙幅の関係上、本論文では寧夏回族自治区について詳述できなかった。同自治区でもイスラーム信仰が否定された実態については、楊海英著『モンゴルとイスラーム的中国』(文藝春秋、二〇一四年) 参照。

ンゴル人のなかには総死者数は三十万人に上ると主張する人もいる[6]。私は独自に入手した東部フルンボイル盟における被害状況の政府統計をもとにサンプリング調査した結果、イギリスの文化人類学者が算定した犠牲者数十万人は妥当な数字だと推察している[7]。

中国政府と中国人（漢民族）はまず、自治区の党政府と軍の最高指導者ウラーンフーに「民族分裂活動」を推進し、クーデターを企んでいた容疑があるとして、「ウラーンフー反党叛国集団」の粛清を文革開始二年前から用意していた[8]。「ウラーンフー反党叛国集団」は主として自治区西部のトゥメト地域のモンゴル人からなり、彼らを粛清するのに中国政府と中国人は自治区東部出身で、満洲国時代に育った軍人や知識人らを動員した。満洲国時代に育ったモンゴル人は中国政府と中国人から「日本刀を吊るした奴ら」と蔑称されていたが、彼らは中共に唆されて、仲間を裏切った。

東部出身の「日本刀を吊るした奴ら」が中国政府と中国人に媚びても、過去の「罪」の禊にはならなかった。彼らの大半が一九二五年に成立した内モンゴル人民革命党の党員だったことと、満洲国時代に「対日協力した」し、日本が撤退した後には中国政府と中国人を愛さずに同胞のモンゴル人民共和国との統一合併を求めたことで、一九六七年夏あたりから粛清の対象とされた。そして、この「民族分裂主義集団のボスもまたウラーンフーだ」と認定された[9]。「日本刀を吊るした奴ら」が同胞のモンゴル人民共和国との統一合併を推進していた頃、ウラーンフーは「中華民主連邦」内での民族自決を理想的だと主張していた。彼も民族主義者の内モンゴル人民革命党の創立時からの党員だったが、モスクワで国際共産主義の教育を受けた為か、ソ連型の自治共和国形式の民族自決を中国で実現したかったが、与えられたのは実権のない区域自治だった。中国政府と中国人はウラーンフーに不満があると看破し、粛清に踏み切ったのである。

モンゴル人が大量虐殺された背景には時の中ソ対立、中蒙対立もある。「ソ連修正主義者」の侵攻を危惧していた毛の北京当局にとって、北部辺境に独自の騎兵軍団を擁して、党政府と軍などあらゆる権力を一身に集めたウラーンフーとそのモンゴル人同志たちは大きな脅威だった。一九四五年八月にソ蒙連合軍が南モンゴルに入っ

---

6) Shirabjamsu, 2006, *Shirabjamsu-yin Jokhiyol-un Sungghumal*（シャラブジャムソ著作集）, 私家版。

7) Sneath, David, 1994, The Impact of the Chinese Cultural Revolution in China on the Mongolian of Inner Mongolia, in *Modern Asian Studies*, 28:409-430. 楊海英『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料6―被害者報告書2』、風響社、二〇一四年。

8) 楊海英『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料3―打倒ウラーンフー（烏蘭夫）』、風響社、二〇一一年。尚、著者らモンゴル人は、中国人（Chinese）とは専ら漢民族を指す概念で、モンゴル人とウイグル人、チベット人はこの範疇に含まれないとの立場を取っている。

9) 楊海英『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料2―内モンゴル人民革命党粛清事件』、風響社、二〇一〇年。

てきた時に、モンゴル人たちは彼らを「真の解放軍」として迎えていた歴史の再演を防ぐ為に、事前に粛清に踏み切った。

内モンゴル人民革命党員たちが大量に殺害された「罪」の一つに「過去の対日協力」が利用されている事実からすると、内モンゴル自治区での中国文革は「間接的な対日清算」でもあった、と指摘できよう。近代において、多くのアジア民族が西洋列強からの独立を目指したのに対し、モンゴル人とウイグル人、それにチベット人は中国からの独立こそが民族自決の最高の目標だと認識していた。日本のアジア主義者や関東軍もモンゴル人の希望に応えようとしたし、その運動を利用しようともした。そのような近代の民族自決史がジェノサイド発動の正当な理由とされたので、日本もモンゴル人大量虐殺運動について、真摯に思考すべきではないか、と今日のモンゴル人は認識している。

2. 中国人の「国家利益」に抵抗したウイグル人の文革

中国最西端の新疆ウイグル自治区の場合、二一世紀に入るまで、「自治区の主人公」ウイグル人と文革との関連について触れた書物は皆無だった。まるで文革はウイグル人と無関係のように、外来の植民者の中国人たちの「特権」だったかのような印象すら受ける。しかし、いわゆる「西部大開発」が推進され、ウイグル人側の抵抗が激しくなるにつれ、中国政府と中国人が少数民族のレジスタンスを「恐怖（テロ）」として解釈するように変わると、同自治区の文革に関する再解釈も進んだ。結論を先に示すと、現在、中国政府と中国人は、ウイグル人の「恐怖（テロ）組織」はどれも一九六〇年代に「秘密裡に組織」され、そして「文革中の混乱に乗じて民族分裂的活動を推進した」、と断じている[10]。

ここでひとつの実例を挙げよう。

馬大正、という御用学者がいる。彼は江沢民元総書記新疆ウイグル自治区の元書記王楽泉の支持の下で、一九九〇年代から「新疆の安定を強固にする」国家プロジェクトを担当し、『国家利益はすべてを凌駕する―新疆の安定問題に関する観察と思考』（国家利益高於一切―新疆穏定問題的観察與思考、二〇〇三年）と題する書物を公開した。この本のなかで、馬は詳細に文革中のウイグル人の「分裂的活動」について述べている。

ウイグル人は中国人を「黒大爺（ヘイターイェ）」と呼ぶ。このヘイターイェとはヒタイ（契丹）という古い中国や中国人を指す言葉だが、漢字で「黒大爺」と表現することで、「やくざ」とも同義となり、ウイグル人の素直な心情を代弁する呼称となった。馬大正は、

---

[10] 楊海英「ウイグル人の中国文化大革命―既往研究と批判資料からウイグル人の存在を抽出する試み」楊海英編『文化大革命と国際社会―50年後の省察と展望』、一九九―二三〇頁。

早くも一九五六年五月に「平定」した南新疆で見つかった書物のなかに「黒大爺（ヘイターイェ）（中国人）が新疆を植民地にしている」との文言があったことから、「共産党に反対し、人民政府を転覆し、社会主義制度を破壊して、祖国の統一を分裂させようとする反動的な反革命集団はずっと潜伏してきた」、と解釈する。

馬大正は具体的に一九六八年から一九七〇年にかけて活動した「東トルキスタン人民革命党反革命集団事件」と、一九六九年の「カシュガル地域メゲティにおけるアホンノフをボスとする武装暴動」を挙げる。これら二つの事件は一九六八年七月に「発見」され、一九七〇年三月に摘発されている。一九七三年までに調べた結果、ソ連は早くも一九五六年からスパイのトルスンラハモフ（吐爾遜熱合莫夫）を新疆に派遣し、自治区人民政府「東トルキスタン人民革命党」の副主席のザハロフと連絡し、「ウイグル共和国」を作って新疆を独立させる為に動いていたという[11]。

> 文革が勃発すると、独立の機会がやってきたと見たイミンノフとザハロフ、パティーハン（以上いずれも自治区政府副主席）らは裏でトフティクルバン（分裂主義分子で、元自治区出版社ウイグル文弁公室主任）とニイヤーズ・オマル（温泉県商業局副局長）、イスマイル・イブライン・ハサムパルサ（ソ連のスパイ、自治区対外貿易局絨毛廠副廠長）らを動かして謀略を企て、1968年2月に正式に「東トルキスタン人民革命党」という反革命組織を成立した。

「反革命」の「東トルキスタン人民革命党」は一二回にわたって二六人をソ連とモンゴル人民共和国に派遣して、現地の諜報関係者と連絡し合った。一九六九年になると、一二の専区と州（市）、一二六の県と自治区二二の機関に七八もの支部組織を作り、そのメンバーは一千五五二人に膨れ上がったという。この「東トルキスタン人民革命党」はその党綱領のなかで、「新疆は古くから独立した国家だったが、近代に入ってから漢人の植民地となった」、「漢人の植民地的支配を打破して東トルキスタン民族の独立を実現するのがわが党の最終目標である」と掲げていた[12]。

同党の主要なメンバーのトフティクルバンが一九六八年二月に新疆大学の群衆組織に監禁されたことで、その「陰謀」が暴露された。同党が成立して二年もの間、新疆の中国人たちはそれに気づかなかったことが分かる。そして、同党が「新疆大学の群衆組織」によって発見された事実も重要である。新疆大学の群衆組織は造反派かそれとも保守派かは不明であるが、ウイグル人に対しては、造反と保守の垣根を越えて、一致団結して対処していたことは明らかである。換言すれば、東トルキ

---

11) 同右、四二頁。
12) 同右、四三頁。

スタンのような少数民族地域に侵入してきた中国人たちはイデオロギーの面で対立し合うこともあるが、ことに少数民族に対しては常に思想的な違いを越えて連携し合っていたのである。このことは、王力雄が指摘しているように、辺境の漢族すなわち中国人は無原則に北京当局が進める少数民族弾圧政策を擁護し、場合によっては政府の尖兵の役割を担ってきた事実を示している。

一九六八年八月二〇日、「東トルキスタン人民革命党」の「南新疆ブロック」の書記で、カシュガル市トラクター・センターのセンター長であるアホンノフが武装闘争を決行した。人民解放軍と武装警察に弾圧されて、五名の「暴徒」が射殺された。一九七〇年に完全に摘発されるまでに、合計五千八六九人が逮捕され、そのうちの三二人が死刑判決を受けた。かくして「新疆が解放されて以来、最大の反革命組織が殲滅されたのである」[13]。

「分裂的活動」が存在するのは、「ソ連の転覆活動」が原因だ、と馬大正は主張する[14]。ここでも、中国政府と中国人は自分自身にも責任があるという姿勢を絶対に取ろうとしない。何かがあれば、その原因を「外国の一握りの反中国勢力と国内の極少数の分裂主義者の仕業」に帰す政治的な姿勢は今日も固く守られているのが中国である。皮肉にも、中国人の馬大正の著作はそれまでに中国当局が鼓吹してきた「社会主義制度下で繁栄し、発展してきた新疆における諸民族の調和」は嘘で、実際は「分裂的活動」がずっと続いていた事実を公的に認めたものである。馬大正は「祖国の利益を最優先としている」ので、ウイグル人の姿も悪意に満ちた文章で描いているのも特徴的である。

3.「殺劫」としてのチベット文革

中国では「人民の好い総理」と神話化され、日本でも進歩的な知識人に熱愛されている周恩来は一九六六年一〇月一五日に、北京で研修していたチベット人学生たちを前にして次のように演説した[15]。

---

13) 同右、四三―四五頁。

14) 馬大正『国家利益高於一切―新疆穏定問題的観察與思考』、新疆人民出版社、二〇〇三年、三七―四〇頁。中国は文革中に朝鮮族が居住する延辺においても、北朝鮮を「修正主義」だと批判し、スパイの摘発を進めるなど、迫害行為が横行した。権俊寧「文化大革命期における延辺朝鮮族自治州の民族教育と言語問題」『アジア経済』第四三巻七号参照。

15) 楊海英「監訳者解説　強盗の論理を〈奴隷〉の視点からよむ―『チベットの文化大革命』の背景と性質」ゴールドスタイン著『チベットの文化大革命―神懸り尼僧の「造反有理」』（山口周子訳）風響社、二〇一二年、三三九―三四〇頁。

チベットは三回、解放を経験した。第一回は一九五一年に人民解放軍がチベットに進駐し、チベットは祖国の懐に戻った。二回目の一九五九年には農奴を解放し、叛乱を平定して、経済改革を実施し、農奴制度を取り消した。そして、三回目は文化大革命である。ラマ（僧侶）たちが解放された。チベット全体に十数万人ものラマがおり、そのうち九〇パーセントがすでに還俗した。……これは大変素晴らしいことである。

周が「大変素晴らしい」と称賛した「解放」運動のなかで、たとえば一九五九年に人民解放軍がチベット地域に侵略した時の死者数は、青海省あたりでは住民の五〇パーセントにまで上るし、男性がほとんど「絶滅」したところもあった。チベット自治区でも一九五三年には二八〇万人だった人口が、一九六四年には二五〇万人に減少している。こうした事実を国際社会では「ジェノサイド的殺戮」だと認識している[16]。チベット仏教の指導者で、ダライ・ラマと共に亡命せずに、中国との共生を選んだパンチェン・ラマは「解放」がチベットに与えた打撃について調査し、一九六二年五月に「敬愛する周恩来総理と党中央」に次のように報告している[17]。

（二回目の一九五九年）以前に、チベットには大中小あわせて約二五〇〇箇所あまりの寺院があったが、民主改革以降に残ったのは僅か七〇数箇所だ。……一一万人もの男女の僧侶がいたが、今やたったの七千人になってしまった。

右で示した数字と異なる統計もあるが[18]、幸運にも残った極少数の寺院も文革中には全滅となった。中国は「チベット社会はヨーロッパの中世よりも暗黒な農奴制に喘いでいる」と一方的に断定し、「立ち遅れている人びと」に対し、「先進的な中国人」は何をしても「すべて正義による解放」だとして殺戮と破壊を長期間にわたって行ってきた[19]。チベットはその言葉に「革命」という暴力的な語彙がないくらい平和な世界だった。文革に代表される中国の「革命」はチベットに「人類殺劫」という破滅的な結末をもたらした、とチベット人は認識している。新たに創造された「革命＝サルジェ」は「殺劫＝シャーチェ」と同じ発音だからである[20]。

---

16) ステファヌ・クルトワほか『共産主義黒書』、恵雅堂出版、二〇〇六年、二〇七―二一二。楊海英『チベットに舞う日本刀』、文藝春秋、二〇一四年。

17) *A Poisoned Arrow, The Secret Report of the 10th Panchen Lama,* 1997, London: Tibet Information Network, pp52.

18) 別の統計では全チベットに六千程あった寺院が、文革後には僅か十余り残ったという。ロラン・エデ『チベット史』（今枝由郎訳）、春秋社、二〇〇五年、三四〇頁。

19) Tsering Shakya, *The Dragon in the Land of Snows, A History of Modern Tibet since 1947,* 1999, Penguin Compass, pp314-347.

20) ツェリン・オーセル『殺劫―チベットの文化大革命』（藤野彰／劉燕子訳）、集広舎、二〇〇九年。

4.「革命」のカニバリズム―広西チワン族自治区の文革

視点を南中国の広西チワン族自治区に転じてみよう。一九八三年から八五年にかけて、同自治区の文革を清算した際に、政府は次のような統計を公開した。「全広西八七の県と市などにおいて、殺害された者は八万九八一〇人である（民間には十万人以上の説がある）。加害者のうち死刑判決を受けたのは十人で、執行猶予付きの死刑判決は十四人で、四万七千六百七一人には人肉と人間の肝臓を食べたことで党と政府からの懲戒処分が出された」[21]。広西の文革は殺害された者の数が多いだけでなく、四万人以上もの幹部と大衆が「人肉と人間の肝臓を食べた」ことでも世界を震撼させた。文革中の広西で人間が食されていた事実について、鄭義による綿密な調査報告が提示されている。ここで上林県の一例を見てみよう[22]。

> 夜になると、手を負傷者の鼻に付けて息があるかどうかを確認しながらまだ生きている者を探す。みんなで相談しながら、負傷者の上に馬乗りになり、四肢を抑えて「五寸刀」で腹部をえぐる。少し抑えたり、あるいは体を蹴ったりすると、肝臓はにゅっと出てくる。すぐに切り落としてから帰る。……翌朝、「人間の肝臓は美味しいぞ。早く来て腹一杯食おう」と話したり、「切った者には生の肝臓を残しておけ、干し肉にするから」と語りあったりしていた。なかには体の弱い子どもを連れてきて、肝臓を食べさせる女もいた。

上で示した食人を主導した幹部の一人に、謝錦文という男がいた。謝は一九四八年に中共のゲリラ部隊に参加していた。彼らは国民党のスパイを捕まえて、肝臓を食べたことがある。そして、紅軍がかつて革命根拠地の井崗山に結集していた頃も、新兵に人間の肝臓を食べさせていたという。謝錦文の同志たちは調査者の鄭義に対し、「食人は歴史の継続」で、「敵を食す行為」は何も反省する必要はない、と語った。人間を食べる時には肝臓が特に珍重された。その外、生殖器も人気のある部位だった。体の弱い人は特定の部位を食すことで、滋養強壮になるとの信仰があった、と推察できる。むろん、食べた対象は全員、「階級の敵人」だった。党と政府を擁護する保守派が「搾取階級」や「国民党の残滓」とされる造反派を食した例が多かった。

この「革命的なカニバリズム」を鄭義は次のように解釈する[23]。

第一、食人は異なる歴史発展の段階において、ちがう意味合いを有する。原始社

---

21) 暁明『広西文革痛史鉤沈』、香港新世紀出版社、二〇〇六年、三八―三九頁。
22) 鄭義『紅色記念碑』、華視文化公司出版社、一九九四年、二三頁、二六―二七頁。
23) 同上、二三八―二四〇頁。

会では生存の為だったが、専制主義体制下では、憎しみを発散する手段となった。

第二、チワン族社会内には古くから食人の風習があった。その風習に漢族の反人道的な思想が加わり、新しい形式の憎しみの発散方法となった。原始社会の状態から離脱したばかりのチワン族にとって、食人は素朴な行為だが、早くから文明社会に入った漢族にとっては、罪悪に満ちた行為である（傍線は引用者）。総じていえば、「広西における食人の惨劇は、漢族文化とマルクス・レーニン主義の反人道の毒素がチワン族文化に注入された結果である」。

厳しい監視体制下で、タブーとされる事実について長期間にわたって綿密な現地調査を実施した鄭義の業績は評価すべきだろう。彼は、自身が属する漢族文化の反人道的思想がマルクス主義と結合して毒素となってチワン族社会に注入された結果、食人の惨劇が引き起こされたと結論している。漢族は「文明社会」に入っていて、チワン族は「原始社会から離脱したばかり」だとの見解自体が、マルクス流の発展段階論の陥穽に陥っているのではなかろうか。

5. おわりに

文革は、二度にわたって発動された世界大戦と共に「二〇世紀における十大歴史的事件」の一つに選ばれている。中国国内だけでも、迫害を受けた者は約一億人で、犠牲者数は五百万人から一千万人に達する、との公的な見解がある[24]。文革が終息して四〇年経つが、記述も研究も「粗く扱い、枝葉末節に拘るべきではない」との政策が取られてきた結果、具体的な被害状況も明るみになっていないし、政府が設定した禁止領域も多い。共産党一党独裁体制が続く限り、真相究明は期待できないだろう。

中華の周縁、あるいは国際社会にとってはフロンティアでもある少数民族地域の文革は漢族対異民族の形式で発動された。漢民族は無条件で、何ら根拠もなくモンゴル人を「立ち遅れた遊牧民」と見なすし、チベット人を「ヨーロッパの中世よりも暗黒な農奴社会に停滞している」と断じる。そして、「チワン族は原始社会から離脱したばかり」で、ウイグル人も「野蛮だ」と差別する。相手を自分より低い人間、いや、「そもそも自分らと同等な人間ではない」と認定すると容易に殺害に走るのは、ナチスドイツが発動したホロコーストなど、あらゆるジェノサイドに共通する手法である[25]。この点は、文革中の中国政府と中国人にも完全に当てはまる。

日本人には文革礼賛の幻想曲を奏でた自由もあったし、研究や批判する自由も保

---

[24] 加々美光行監修、陳東林ほか編『中国文化大革命事典』、中国書店、一九九七年、一三頁。
[25] 松村高夫／矢野久編『大量虐殺の社会史』、ミネルヴァ書房、二〇〇七年。

障されている。文革の凄惨な実態が世に知れわたるようになっても、礼賛派が自己清算しようとして切腹したという話も、ついぞ聞いていない[26]。「反省」は日本人の美徳で、近代における日本の行為を批判する武器でもあるらしい。であるならば、もう少し明瞭な文革論が礼賛派から発せられてもいいのではないか、と期待しているところである。

備考：本研究は科研費「ウイグル族・朝鮮族・チワン族の文化大革命に関する実証研究」（研究代表：大野旭＝楊海英　課題番号：15K03036）の成果である。『東亜』（No.588, 2016年6月号所載）

[26] 稲垣武『「悪魔祓い」の戦後史』、文藝春秋、一九九七年。